

2026年1月24日

楯谷智子

第383回（2025年11月22日開催）山口西田読書会のプロトコル（2026年1月24日読書会用）

【テキスト】

旧全集第四巻「知るもの」二の第5段落、342頁7行目「我々の判断的知識の根柢には具体的一般者がなければならぬ」から343頁の6行目「意識面に於て具体的一般者が抽象的概念として限定せられるのである。」まで

【キーセンテンス】

343頁2行目

併し判断的知識が成立する限り、特殊化の尖端に於ても一般的なるものが自己自身を失うのではない、却って自己自身に還るのである、自己自身が主語となって述語とならない基体となるのである、主観的なものがかえって客観的ななるものを包むのである。

【考察と問い合わせ】

キーセンテンスと同じ段落に「かかる一般的なるものが限定せられるかぎり、判断的知識が成立するのである、之を越ゆれば全然直観の世界に入る。」（342頁10行）、「唯その個物的なものの尖端においてのみ、自己同一として直観的と考えられる場合、その述語的・一般的者は積極的に限定すべからざるものとなる。」（342頁12行）とあります。特殊化の尖端においても「判断的知識」は成立し得るのでしょうか。